



Title	水の淀みから : ベラウ文化の音楽学的研究
Author(s)	山口, 修
Citation	大阪大学, 1991, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/37731
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・（本籍）	やま	ぐち	おさむ
	山	口	修
学位の種類	文	学	博士
学位記番号	第	9784	号
学位授与の日付	平成3年4月10日		
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当		
学位論文名	水の淀みからーベラウ文化の音楽学的研究ー		
論文審査委員	(主査) 教授 谷村 晃		
	(副査) 教授 山崎 正和 助教授 小松 和彦		

論文内容の要旨

本論文は、学問として成立して以来2世紀目に入って間もない「音楽学」の過去と現在の状況を踏まえて、音楽学が将来とるべき道を地球規模の問題として考察すると同時に、その理論を具体的にひとつの民族に適用して音楽民族誌を構築しようとする意欲的な研究である。

音楽のさまざまな側面を知的あるいは分析的に概念化し、それを身体行動や言語行動（用語化・発話・書きとめ）に帰するのはあらゆる民族が成し遂げてきたことである。しかし、少なくとも「音楽学」と銘打って「学」としての方法論に裏づけられた形でそれをおこなうようになったのは、ヨーロッパが最初であり、それがアメリカに伝わり、欧米の強固な体制ができあがった。その影響はやがて、アジアへ、そして最近ではアフリカやオセアニアへと拡散していく。他方、それぞれの地では、「音楽学」なる名称を冠していないとはいえ「学的な」研究が程度の差こそあれなされていたので、欧米から流入した音楽学とのあいだに摩擦が生じたり、それを一方的に受容する傾向さえあった。

それぞれの民族に固有の感性や知性を尊重するべきであるということは多くの地域で主張され続けてきたものの、そうした考えを方法論として掲げた「民族科学 ethno sciences」の名のもとに、旧来の欧米中心主義的な動向に揺さぶりをかける主張の発信地となったのは、皮肉なことにやはり欧米であった。というのは、固有の価値体系を標榜してきた非欧米の人々は、自分たちの伝統を重んじるあまり異文化に備わる固有のものに目を向けず、普遍的に通用すべき理論としてその考えを敷衍することができなかったためである。幸いにして、そこに新たな比較文化の視点が導入されることにより、従来見落とされていた文化の側面にも配慮をほどこした学の潮流が各国で着実に動きはじめた感があるのが現状である。

日本の音楽学の歴史をふりかえってみれば、古来「和学や漢学の系統をひく流れ」に加えて、洋楽

一般や西洋音楽の大量受容にバックアップされた西洋風の「音楽史学」や「民族音楽学」の流れが、それと交わることなく走り始めた時期があった。西洋風の音楽学には、音楽美学や音楽社会学・音楽心理学などの傍流もあるが、ここでは上記の二大潮流のどちらかに属するものと便宜的にみなす。また、ここにいる「民族音楽学」は、上記の一連の民族科学の一員としてのものではなく、単に対象を主として「非西洋音楽」に向けたものにすぎず、方法的には西洋風の考えと手続きを踏んだものが大半であった。しかるに最近では、これら三つの流れのすべてに通暁するごくひとにぎりの研究者のあいだで、それらのどれにも偏らない着眼点と方法にもとづく「音楽学」の定義づけが必要であることが認識されはじめていると筆者は主張する。

本論文では、こうした理想を求める動きに応じて、従来の民族音楽学に身をおいていた筆者の立場から「普遍的に有効であるべき音楽学」の定義が試みられる。それが「第一部、音楽学の定義」である。

第1部は対象・資料・方法を新たな枠組から論じる三つの章から成る。結論として筆者は音楽学を次のように定義する。すなわち「音楽学とは、人類の個人から小集団・共同体・地方・部族・民族・国家・人種・全人類にいたるさまざまなレベルの文化のなかに見いだされる音楽表現、音楽文化、およびその周縁事項をあつかい、その内的構造（音楽構造）と外的構造（脈絡構造）の解明はもとより、それらの相関関係を把握することにより、人類の音楽性を文化の個性性と普遍性という二極間に位置づけながら音楽の本質を解明しようとする学問である。方法としては、現在あるいは歴史的現在の共時性 synchrony に着眼点をおく『比較学的方法』、現在から過去へあるいは過去から現在への通時性 diachrony に立脚する『歴史学的方法』、主として未来にかかわる問題を実験的にあつかう『応用学的方法』の三つに大別される」ものとする。

第1部で筆者が一貫して強調する問題意識は、①音楽を他の文化事象との関連および対比において捉えること、②「書記性 literacy, écriture」の概念を拡大して「音楽のある側面を有形の事物に変換し固定するすべての伝統伝承行為」とみなすこと、③「口伝性 orality」を「口で（ことばで）伝えられる」ものだけではなく、さまざまな身体表現をも含めた「身体性 somaticity」の一環であると考え、④書記性の顕現としての文書・楽譜類に偏重せず、口伝情報や演奏そのものを資料に含め、批判的処理を加えて対象化すること、⑤地理的に遠隔であったり日常的に軽視されがちな文化の「周縁」的側面をむしろ「中心」とみなすことが有効な方法となりうる、⑥文化や個人のあいだで異なる感性・知性の枠組みを交差させる「多重イーミックス multi-emics」を方法化することなどである。

第1部で提示された「音楽学の定義」に従った具体的事例研究が、第2部（第4～6章）「ベラウ音楽を支える時空」および第3部（第7～9章）「ベラウ音楽の共時性・通時性」で展開される。

第4章「オセアニアのなかのベラウ」では、地理的・歴史的側面のみならず、音楽芸能の面でのベラウ文化の基礎的な情報が大きな枠組みのなか位置づけられる。オセアニアの三大地理区分の一つであるミクロネシアの最西端に位置するベラウは、日本統治時代（1914-1944）には南洋群島パラオ諸島、アメリカ合衆国支配時代（1944-1981）には太平洋信託統治領パラオ地区と呼ばれていたが、19

81年以来「ベラウ（パラオ）共和国」を名乗っている。しかし、未だ完全な独立を達成したわけではなく、政治経済上の理由からアメリカとの自由連合の形態をとるべきかどうか国民の合意が図られている段階であり、それが決定されるまでは相変わらず信託統治の状態に甘んじなければならない。人口一万数千のこの小さな島国は、外界との交渉が極めて限られた自律的な文化を営んでいた。大文明との接触は18世紀末に始まり、19世紀にはその頻度が次第に高まっていった。19世紀末にはスペイン、20世紀初頭にはドイツの領土となったが、当時はキリスト教化が進行したことを除けば文化変容はまだ顕著ではなかった。だが、ブリリョウ（ペリリュー島）などが悲惨な戦場と化した太平洋戦争をはさむ日本・アメリカの統治は、その文化を根本から揺さぶる大きな影響をベラウに及ぼした。

こうした外的要因による歴史変化にもかかわらず、ベラウ文化のアイデンティティが保持されてきたのは、固有の時間観念（ひいては歴史観）と空間観念（ひいては世界観）により文化が営まれてきたからであるとする。それは具体的には、過去・現在・未来や大地・海・天空が相互関連性をおびた用語で概念化され、それらが音楽や舞踊をはじめとする文化事象のなかに構造化の要因として反映されているからであると言う。筆者は、このことを解明する手がかりが神話伝説のテキストや音楽舞踊の「テキスト」をひもとくことによって得られると考える。

第5章では、エレアル（明日）とエレアン（今日）という名前の異父兄弟を主人公とする伝説を出発点にして論が展開される。母系の出自集団を社会組織の骨格に据え、互酬・互惠的に生活が営まれるべき規範があるにもかかわらず、義父の手痛い仕打ちをくらったエレアルは、「エレアン（今日）のことしか考えないんだね。エレアル（明日）のことは頭がないんだね。」と捨てゼリフを吐いて家出する。この伝説は通常、「明日に備えて今日できることをやっておかなければならない」ことを教訓とするものとしてベラウ人に親しまれているが、ベラウの時間観念がそこに秘められていると解釈することもできる。すなわち、兄弟であることの同質性、父を異にすることの異質性が「未来」と「現在」に認められる。次に、人々が共有し確認しあう「現在、いま」という時間がいかに貴いものであるかが「別れの歌」という舞踊曲の歌詞と音楽舞踊構造に即して論じられる。曲のほぼまん中に配置された「いま」という単語は、それが歌われる前に生じた歌詞・音楽・舞踊的テキストの複合体を「過ぎ去ったもの」として背後に担いつつ、「これから生じるもの」に関連づけられるべく待ちうけるのである。さらに、文化人類学者マクナイトが「昔がわかれば未来がわかる」と翻訳した諺のテキストをもうひとりの文化人類学者ネロが「過去に起きた悪い事柄は廃棄されてしまい、よい部分だけが残って現在を形成している」と解釈しなおしたことにもとづき、さらにベラウ国立博物館研究員ケンピスから得た説明に照らし合わせて、ベラウ人が「過去」と「未来」を同一視していることが指摘される。

第6章「ベラウの空間観念」では、「ブラスの遺志」という英雄賛歌の歌詞と背景伝説に組み込まれた地名や空間概念を素材にして、「静止し収斂する」空間と「移動し拡散する」空間が相互の関連のもとで意識されていることが分析される。しかも、空間観念は先述の時間観念と切り離せない「時空間観念」を形成しており、先の諺を総合的に解釈しなおすと「淀んだ水は混沌たる時空であり、そこには本質が隅々まで漂っている」という隠喩表現であることが判明するとする。

第3部を構成する三つの章は、ベラウ文化の音楽誌と音楽史の試みである。第7章で提示される「ベラウ音楽舞踊分類学taxonomy」は、書伝や口伝のあらゆる情報を駆使した総合的・体系的・立体的な概念図である。すなわち、すべての種目が内的・外的構造、用語法、起因関係、共時性・通時性の観点から多重イーミックスの・分類学的に分析された結果が提示される。

第8章は静態論的モノグラフであり、行動・機能・構築という柱を用いて、安定した時期のベラウ音楽文化が再構成される。音楽の概念・創造・継承を具体的に可能ならしめる一連の人間行動や、社会生活のなかで音楽がはたす政治的・経済的・伝達の・心理学的機能が記述され、そのような属性をおびた音楽がどのように多層的に構築されているかが論じられる。すなわち音の高さ・持続・強さ・色合いの要素が有機的に活用されて、独唱・多声合唱の歌唱形式や身体動作のパタンとして具現化され、文化的な意味を担う虚構の時空が「構造としての混沌」をテキスト化するのであると言う。

第9章は、将来徹底的に展開されるべき動態論の手がかりをつかむために、まず19世紀後半にベラウ滞在を経験したドイツ人動物学者ゼンパーの手記のひとつだけのみが、筆者自身が1965～1966年および1989年におこなったフィールドワーク体験に照らし合わせて分析される。次に、1930年代の田辺・村主による録音と筆者自身の録音や体験学習とを軸にして伝統継承の質と量が考察される。さらに、論文全体をしめくくるために、未来を考慮にいれたラジオ放送番組制作（ベラウ放送局用）の体験について述べられる。

本文192ページ（1ページ：31字×31行）、400字詰原稿用紙換算約460枚。付録1～5（ベラウ語音声学・表記法、歌詞集、歌曲ドキュメンテーションの一例、文献表、ベラウ音楽舞踊分類学）、73ページ、400字詰原稿用紙換算約175枚。

論文審査の結果の要旨

本論文は、グローバルな視点に立って文化としての音楽をとらえることによって、音楽学研究を人文・社会科学の広い関連のなかに位置づけ直そうとする意欲的な研究である。全体は、この新しい立場から音楽学の再定義を試みる第1部と、その定義の有効性を証明するための応用編としてのベラウ音楽誌構築の第2～3部とからなっている。表題にある水の淀みは、ベラウの時空観を特色づけることばであると同時に、筆者の定義づける音楽学の広さと深さ、さらにはそこに漂う真実を象徴することばとして受け取ることができる。

評価すべき第1の点は、従来ヨーロッパ中心の発想と視点から捉えられてきた音楽学を、地球規模の視野と人文・社会科学の広領域にまたがる学際的把握を通じて、地球上の全地域と全時代の音楽現象に対応し得る音楽学へと展開させた構想の壮大さとその新鮮さにある。ここに示された音楽学の新しい定義づけによって始めて、音楽学は人文科学のなかに確固とした市民権を得ると同時に、現在の先端的学術研究の一翼を担う学問としての地位を確保できるものと考えられる。こうした音楽学の再認識ないしは再定義は、日本やアジアを始めとする欧米以外の地域における音楽学研究を推進する上

で積極的な意味をもつものと思われる。

評価すべき第2の点は、第1部で展開された新しい音楽学の方法を具体的に示すために、以前調査したミクロネシアのペラウの事例に焦点を当て、これを内面的に深化させながら上記の音楽学の再定義と対置させた論文構成の巧みさにある。実際には、南太平洋地域を始めとする筆者の数多くのフィールドワーク体験とその過程での深い美学的、音楽学的思索が上述の音楽学の再定義に先行しているわけであるが、本論文におけるような形でそれが配列されることによって、フィールドワークに基づく研究が陥りやすい研究の局所的狭さが見事に回避されている。細部への深められた視線が全体把握につながる数少ない優れた研究のひとつであるといえる。

評価すべき第3の点は、欧米型の時空観とは異なるペラウ独自の時空観を発見し、これを「水の淀み」ということばで表した筆者の発想の独創性にある。それは単にペラウ独自の時空観の問題にとどまらず、欧米型の思考論理では生まれ得ない自然観、宇宙観、人生観への共感として、読者にある種の価値の転換を迫るものである。

評価すべき第4の点は、ペラウ音楽分類学に示されたように、錯綜する脈絡に組み込まれた大量情報を整理、分類するシステム開発の鮮やかさと、そのシステムによって事態の全体像把握に至る手続の慎重さと緻密さにある。この長所がそのまま本論文の作成にも生かされているとみることができる。その意味でも、本論文は錯綜したデータを扱わなければならない民族音楽学研究のひとつのモデルとなり得る優れた業績である。

評価すべき第5の点は、付録に見られる「ペラウ語音声学・表記法」、「歌詞集」、「歌曲ドキュメンテーションの一例」、さらに巻末折込の「ペラウ音楽舞踊分類学」に見られる初出の諸資料の学術的価値とそのデータ処理の鮮やかさにある。これもまたおよそ考え得るあらゆる情報を学術資料として整理しなければならない民族音楽学研究にとって貴重な参考となるものである。

以上、本論文の卓越した諸点を列挙したが、その一方で本論文には若干の問題点もみとめられる。第1部で論じられたような音楽学の再認識による再定義が、古代ギリシア以来のヨーロッパの長い学問伝統の上に成立した欧米の音楽学をどこまでカバーできるかという問題が残る。この新しい音楽学の定義が、理論的には西欧的音楽学をも含み得ることになってはいるが、そのことを具体的に示すための事例をペラウだけに絞ったことが、一方では本論文の長所になっているが、他方では本論文に物足りなさを感じさせる要因ともなっている。その意味ではペラウの時空観に対比できるような事例、例えば筆者が調査した極地に住む狩猟民族の時空観等を取り上げて欲しかった。また、ペラウは筆者の研究者としてのアイデンティティを保証する根拠地として、短期間ではあるが再度訪問してその成果を有効に利用しているが、筆者が調査した事例で本論文に組み込むことができるものがまだ多くあるはずである。その意味では、今後の研究に期待されるところ大なるものがある。

しかしながら、これらの点は、いずれも近い将来に改めて論じられるべき問題であり、きわめて精度の高い本論文の価値を損なうものではない。

以上のように、本論文は現時点での筆者の民族音楽学者としてのアイデンティティと、今後の音楽学のあり方に対する筆者の強い主張をこめた提言として高く評価できる。この分野の研究でこれほど

見事に問題を整理したものは数少なく、そのなかでも特筆に値する優れた論考である。そこには、民族音楽学、音楽学さらには美学の研究者としての筆者の資質が良く示されているのみならず、本論文は音楽学に新しい地平を拓くものとして高く評価できるので、文学博士（論文）の学位申請論文として十分の価値を有するものと認定する。